

体育学における文化論議の一形式と その形而上学的契機

—Spranger, E. の教育学における文化論議に基づいて—

阿 部 悟 郎

- 〈目 次〉
- 1 序 論
 - 2 本 論
 - 2.1. Spranger, E. の教育学とその文化教育学的形式
 - 2.2. Spranger, E. の文化論議と文化の階層性
 - 2.3. Spranger, E. の文化論議と文化の循環性
 - 2.4. 文化運動の方向性とその根源的動因
 - 2.5. Spranger, E. の文化論議とその基底にある形而上学的契機
 - 2.6. 体育学における文化論議の可能性
 - 3 結 語
 - 4 註および引用・参考文献

1. 序 論

体育の本質論議を厳密におし進めていこうとする時、多くの重要な問題の一つとして文化についての論議も立ち現れてくる。体育学における文化論議も、そのいくつかは教材論として、あるいは社会学的な問題設定のもとで多様に展開されてきた。また、とりわけ体育思想・哲学的な問題領域においては、例えば身体文化論や比較体育論等の形式でも扱われている。ただ、体育学において、そのように多岐に広がる文化論議がやがてそこに収斂するような、根源的で中核的な文化理論が確立しているとは言い難い。おそらく体育学における文化本質論議が望まれるところではあるが、やはりそれは永い論議の積み重ねの上にようやく成就するように思われる。従って、さしあたっては、体育学において多くの文化論議を立ち上げ、慎重な検討を繰り返し、文化論議の問題領域を拡充していくことが必要であろう。

さて、体育学において文化論議を試みる場合、そこに他領域において提示された文化理論を応用的に適用していくことも有効であろう。おそらくそれが示すところは、体育学において扱われる文化形式それ自体の理解・解釈に重要な視点をもたらしてくれる。ただ、体育学における文化論議は、やはりその問題設定の根幹に教育学的要求が通底するが故に、教育学的思考の枠内において展開された文化論議が、より直接的な示唆を与えてくれるように思われる。従って、ここでは、体育学における文化論議の直接的な典拠を、教育学領域における文化論議に求めることとしたい。

そこで、体育学が、教育学における文化論議を求め、そこに立ち入っていく時、そこには文化論議の多様な広がりを見ることができることであろう。そこでの各々の個別理論の相対的な位置関係が必ずしも明確ではないが、それらは、それ相応の歴史的必然性を有しているのは言うまでもなく、そこに一定の教育学的有効性が存在することは疑いない。それ故に、体育学がその根底にある教育学的要求から文化論議を立ち上げるならば、本来、それらの

全てに周到に学び、有効な契機を抽出していく必要がある。そこで、改めて教育学における文化論議の広がりを目を向けてみると、いくつかの顕著な文化論議の一つとして、Spranger, E. (1882-1963) の教育学における文化論議が映じてくる。そして、彼の文化論議は、教育学における文化論議の確かな一形式として捉えられている⁽¹⁾。おそらく、彼の教育学における文化論議は、体育学における文化論議に有効な示唆をもたらしてくれるように思われる。本稿においては、彼の教育学における文化論議の分析を通じて、体育学における文化論議の一形式を試み、その学的契機を模索していきたい。

2. 本 論

2.1. Spranger, E. の教育学とその文化教育学的形式

Spranger, E. は、ドイツ教育学において、一般に正統と目されてきた⁽²⁾、いわゆる精神科学的教育学 *Geisteswissenschaftliche Pädagogik* の最も重要な代表者の一人として挙げられ、さらには20世紀の世界が生んだ最大の思想家の一人としても数えられてもいる⁽³⁾。そのような彼の教育学理論は、人間学的教育学 *Anthropologische Pädagogik* に位置付けられているが、その理論的な総体のある部分は、特定的に「文化教育学 *Kulturpädagogik*」とも称されている⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾。

さて、一般に、この文化教育学は、教育学において文化と教育の関係をはじめて主題的に考察した教育学理論とされている⁽⁷⁾。そして、この文化教育学は、当該時代においては最も進んだ教育学理論として注目を浴び、やがて当時のドイツ教育学界を代表する学理論となっていく⁽⁸⁾⁽⁹⁾。即ち、文化教育学は、1920年代のドイツ教育学の主流をなした教育学理論なのである⁽¹⁰⁾。そして、この文化教育学の祖は Paulsen, F. とされているが、一般にその代表については Spranger, E. とされている⁽¹¹⁾⁽¹²⁾。

Spranger, E. は、その修学の時期もさることながら、1920年代に入ると

哲学・心理学・教育学に関する数多くの質的にも高い論文を続々と発表し、自らの文化教育学理論を基礎づけていった。⁽¹³⁾例えば、この時期の著作の一つに『Lebensformen』がある。これは彼の代表的著作の一つであるばかりでなく、彼の文化教育学理論を分析する上で、極めて重要な文献である。即ち、そこには、文化に関する最も詳細かつ体系的な論述が見られる⁽¹⁴⁾が故に、これによって彼の文化哲学と教育の根本思想を窺い知ることができる。⁽¹⁵⁾この意味において、それは彼の文化教育学の思想の核心を把握しようとするならば、必ず踏まえてはならない文献であるとされている。⁽¹⁶⁾彼はこれによって、自らの思想的な立場を確立したのである。⁽¹⁷⁾それはまさに文化教育学の立場であり、前期 Spranger, E. 教育学の重要な特徴の一つであると言っても過言ではないかも知れない。従って、そこにみる文化論議こそが、いわゆる、文化教育学理論における文化論議の主導的な形式として捉えられ得るように思われる。

ただし、おおよその学理論は、固定的完結的なものではなく、常に進歩・発展の途上にある。無論、Spranger, E. の教育学理論も常に発展の動態の中にあった。とりわけ、大戦後の1945年以降の著作は、1920年代に比して次第に変化を遂げていき、それはもはや文化教育学とは呼べないほどの変化であったという。⁽¹⁸⁾即ち、文化教育学の観点というよりも、実存主義的教育学理論の方向に接近していき、つまりは戦後の彼の教育学理論は、文化哲学的教育本質論を脱して形而上学的教育本質論が前面に押し出されていったのである。この意味において、彼の教育学理論における文化教育学的形式を特定するにあたっては、本来、彼の戦前の著作、いわゆる前期 Spranger, E. 教育学を中心に検討していくことが適当かも知れない。

そうではあっても、Spranger, E. の文化論議については、一定の連続的位相の発展的展開のもとに把握されるべきである。即ち、その総体を一つの固定的全体として捉えることより、個々の論議が連続的位相とその内的相互連関において、相対的に把握されることが望ましいように思われる。おそらく、彼の前期の教育学理論において顕著であった文化教育学的内実は、大戦

後に全く消失していったのではなく、その教育学的思考の内に深く沈潜していったのである。実際、彼は中後期、いわゆる大戦中から大戦後においても、数多くの文化理論的な著作を公にしており、それらは前期の文化論議と根幹において連続的に繋がっていることを考慮するならば、彼の文化論議をより適正に把握するためには、敢えてそれらを除外することに積極的な理由は見あたらない。むしろ、そこには、文化教育学理論における文化論議の発展の軌跡の一形式が示され、なおかつそれに関する一定の理論的完結性を読みとる意味において、有効な示唆が得られることであろう。ここでは、彼の文化論議について、基本的には、その代表的著作“Lebensformen”を中心とした前期関連著作を中心としながらも、それ以降の文化理論的な著作をも併せながら分析対象として、検討を進めていくこととしたい。

2.2. Spranger, E. の文化論議と文化の階層性

まず、Spranger, E. の文化思想については、「その絶頂においてプラトンの理念界にも近い超時間の雲を貫いているが、その麓は泰然として時間の経験的地盤に基礎を据えている⁽²¹⁾」と評されている。ここから彼の文化論議が、水平方向においては、経験的＝現実的次元を見据えつつも、形而上学的次元へとつながる垂直的な方向性をも併せ持つものと推察される。このことは、彼の文化論議が、文化自体の法則性を扱う純粋な文化理論とともに、現代文化批判と西欧文化問題を同時に内包していることから窺い得る⁽²²⁾。文化問題とは理念的でありつつも、常に現実的である。そして、文化論議は、現実的でありつつも、そこには常に理念的な方向性が胎動している。取り急ぎ、彼の文化論議に立ち入ってみることとしたい。まず、彼の、文化それ自体については、どのように表現しているのであろうか。彼は、次のように述べる；

「文化 Kultur は、時空間に制約されてはいるものの、そこには本質的に規定され、なおかつ相互に等級が付された価値が実現されている⁽²³⁾。」

端的に表現するならば、Spranger, E. は、文化を現世的な制約のもとでの価値の実現とみる。即ち、現実にある全ての文化には、所与の歴史的・物理的制約のもとで、ある価値がある特定の形態によって実現されている。従って、芸術作品であれ文芸であれ、そこにはある価値が所与の制約のもとで具体的な形象によって表現されている。価値を具体的に表現するのは、超越的な神々ではなく、やはり現実に生きている個々の人間である。即ち、文化はそこに生きている人間、あるいはかつてそこに生きていた具体的な人間による価値実現の営為に依拠する。彼は次のように述べる；

「文化とは、目の前の自然に対して、または目の前の自然を超えて為された、人間の意味付与 Sinngebungen の刻印 Aufprägung であり、そして数千年の永きに亘る営みの中で積み重ねられてきた、人間的—精神的営為の総和であり、そして人間的—精神的価値の総和である。」⁽²⁴⁾

これによれば、文化は、まさに暗中より現れ出で来たものではなく、個々の人間の具体的・実質的な精神的営為の一つひとつによって、永きに亘って積み重ねられてきた価値の歴史的な構成体に他ならない。そこで、Spranger, E. は、文化論議の前提として、価値と精神を近似的な関係として捉え、まずそのような精神的営為が展開される人間の内面性に目を向ける。その際、彼は、人間の内面的過程 innern Vorgang を構成要素に分割することによって分析する方法をとらず、それを意味規定的な全体 sinnbestimmtes Ganzes として捉え、それを人間の精神的な総合状態 geistigen Gesamtsituation のもとに理解しようとする。彼は、このような方法を、特定的に精神科学的思考 geisteswissenschaftliche Denken であると強調する。⁽²⁵⁾ このような精神科学的思考が、彼の文化論議をも一貫しているのである。これによって、彼は人間の内面性を把握するうえで、そのような意味規定的な全体をある関係性から捉えようとする。彼は次のように述べる；

「人間の内面性 Innerlichkeit が、常に客観的形象 objektiven Gebilden に関係しているということが真実なのである。何よりも、客観的 objektiv とは、個々人から独立し、そして個々人に対立しつつ、個々の自我 das Ich に対して作用を与えるものと理解している。」

人間の存在のうちなる世界、即ち内面性が、全く外界を遮断して孤立的に存するものというよりは、外界に存する多様な歴史的・現世的形成物との関わりの中で実体化されている。即ち、成長過程において認識が分化し、世界を対象化できるようになった自我は、世界に存する具体的な客観的形象と対峙しつつも、それらとの関わりを通して、独自の内面性を形成していく。つまり、人間の精神的営為は、全く自閉的な内面性の動態ではなく、主観と客観の対峙的・作用的な関係から論じられていく。即ち、客観は自我に対して作用を与えてくれる。まさに客観は、人間の精神的営為に対する作用項として関係するのである。人間の内面性とはそのような関係的な世界である。そして、このような内面性こそが、主観 Subjekt なのである。そこで、彼は次のように述べる；

「主観を、その歴史的・社会的な精神世界の諸形象に編み込まれた体験 Erleben と形成 Gestalten と考えるならば、自我をただの自分という状態の孤立性や孤島状態から解放し、対立的な形象や客観的なものとの関係に置いてくれる。そして、それは次の三つの意味において客観的であると言える；

- (1) それが物理的形象に付着しているからである。それは、直接的に価値を担うものとして、あるいはその徴表として、または美的な表現媒体として作用する。
- (2) それが数多くの個々の主観の相互作用から生じているからである。その限りにおいて、それは集合的に基礎づけられた形象と呼ぶことができる。
- (3) それが意味付与または意味理解に関わる一定の法則に基づいているからである。」

Spranger, E. の文化論議の基本的な姿勢は、文化を単なる固定的な形象として捉えることなく、人間の精神的営為とその価値実現の動的な関係にお

いて捉えようとしたところにある。いわゆる当時の要素分析的な心理学は分断された主観を注視するが、彼は、客観という視座から、主観－客観の相互作用を読み解こうとしたのである。⁽²⁸⁾ これによって、そこから客観についての三つの段階が導かれてくる。即ち、第一に、客観との関係によって構成された主観の内実とその価値の具体的徴表、第二に、そのような主観の価値創造・表現の相互作用的な集積により構成される価値形象の総体、第3に、その総体の基底に通底する法則的な規範性である。そこで、この段階の各々について、個別に辿っていくこととしたい。

まず、Spranger, E. の文化論議は、主観についての論議から始まる。前述のごとく、個々の主観は、客観に対して常に対時的な関係にありながらも、所与の歴史的＝社会的形象に編み込まれており、その前提から主観の精神的営為が進んでいく。この意味において、それは、人間の精神の、第一の客観性と言える。従って、それは単なる情緒反応や欲求充足といった内的必然性というよりも、むしろ外の歴史的＝社会的な精神世界との対峙・作用的な関係においてはじめて実体化されるという意味において、広大な価値連関 größeren Wertzusammenhang に織り込まれていると見る方が正しい。彼はこれを主観的精神 subjektiven Geist と呼ぶ。⁽²⁹⁾ そして、彼は、そのような主観の精神的営為を次のように述べる；

「主観の心における諸機能の絡み合いを精神的営為と呼び、そこから超個人的な意味を有する客観的な意味形象が創造されていく。人間の心が単なる生物学的構造連関ではなく、むしろ精神的構造連関である限りにおいて、超個人的な意味形象に対する活動と創造の能力を有するのである。」⁽³⁰⁾

Spranger, E. の文化論議において、主観とは、単なる存在の内的機構ではなく、精神的営為によって価値＝意味形象を創造する能力を有する。それは価値＝意味形象の雑多な集積ではなく、そしてそれは諸機能の自閉的な脈絡ではなく、価値＝意味形象が創造されていく泉 Quelle である。即ち、価

値や意味が超驗的な世界に住まうというよりは、むしろ個々の人間の精神的営為によって創造されていくものである。彼は、次のように述べる；

「創造とは意味深い精神作用を通じて、自らの主観から客観的な価値形象を構成し、それが他者に向けられ、他者によって理解され、そして享受され、そして発展的に再構成されていく。創造においては、精神的営為の動きが、主観から客観へと向かうのである。」

まさに創造とは、自らのうちから新たな価値形象を構成していく精神的営為である。従って、創造とは、まさに精神的エネルギーが主観から客観へと向かう外向的な精神活動と言えよう。さらに、それはそこを超え出る超越的契機をも内包する。従って、それは表現によって主観を離れ、やがてまた他者によって対象化され、享受され、そのうちに入り込み、他者の精神的営為によって新たな価値形象が再構成されていく。ところが、人間の精神的営為は、このような創造のみではない。人間の精神的営為には、このような創造に対応するもう一つの形式がある。それが、「体験」である。Spranger, E. は次のように述べる；

「体験 Erlebnis は、意味受容的あるいは意味充實的 *rezeptive oder sinnfullendes* な精神的行為であり、自発的で意味付与的な精神的行為としての行為（創造）に対応している。体験において、歴史的な所与の精神的構成体を通じて、超個人的な意味に出会う。また、体験において、同様に、自らの心的状態の現実に応じて、その意味を翻訳する。また、例えば、他者の話す内容を理解するとき、芸術作品を愉しむとき、自らの運命において神の御手を見いだすとき、そして誰かに愛されるとき、それが即ち、体験なのである。」

人間の精神的営為には、創造という外向的方向性のみならず、体験という内向的方向性も相互的に存在する。即ち、体験は、価値や意味を受容する精神的営為であり、全体的価値連関において主観の内へと方向をとる。これに

よって、人間は、個々の制約において歴史的・形成物に内在する固有な価値を独自の形式で翻訳的に受容するのである。従って、価値や意味は純粋な形式でそのまま受容されるわけではなく、むしろ個々人の偶然性・固有性において特有の形式において受容されていく。それ故に、そのようにして構成された価値形象は、決して理念的な価値と一致することはない。そうではあっても、このような体験という価値の翻訳的受容によってのみ主観の価値世界が構成されていく。そして、その主観の独自の価値世界の泉から、それに対応した価値＝意味形象が特有の形式で創造されていくのである。

このように、Spranger, E. は、人間の精神的営為に、この受容と創造という二つの対応しつつも相異なる行為方向を認める。まさにこのような精神的営為によって、人間は価値を受容し、そして創造する。彼は、そのように創造された価値を人格的に表現することによって表現された価値＝意味の具体的形象に超主観性 Transsubjektivität を認め、それを客観化された精神 objektivierten Geist と呼ぶのである。従って、彼の文化論議において、主観は、その精神的営為から二つの精神様態、即ち主観的精神と客観化された精神に区分されていく。

次いで、Spranger, E. の文化論議は、第二の客観性、即ち、個々の主観の価値表現の歴史的な集積により構成される価値＝意味形象の総体としての客観性へと進む。彼は、これを先の主観的精神、客観化された精神という表現に対比して客観的精神 objektiven Geist と呼び、次のように説明する；

「客観的精神は、無数の主観の営為の歴史的相互作用や歴史的総計からのみ把握され、超主観的なものとして対象性の領域に構成されるものである」。

客観的精神は、個々人によって表現された無数の超主観的精神の不断の相互作用とその集積から構成されていく。それ故に、Spranger, E. は、そこに集合性 Kollektivität を認め、従って、個々人の創造がある限り、文化は常にその相互作用と集積を通じて構成され続けていく。ただし、それは、

そのうちに確かに多くの超個人的な内実を積み上げているが、人間を離れて超然と存在するものではなく、やはり個々の主観や意識を通じてのみ生き続けることができる。⁽⁴⁰⁾ まさに、その文化の生の直接的な担い手は、個々の人間の主観であった。文化形象のいかなるものも、生き生きとした主観との結びつきから全く離れることはできない。⁽⁴¹⁾ 客観的精神は個々の主観が創造し、対象領域において超主観的に構成されていくとしても、それを直接的に担う人間の主観によって支えられているのである。

さて、Spranger, E. の文化論議は、第一の客観性、第二の客観性を経て、やがて第三の客観性、即ち、法則的な規範性という意味での客観性へと進む。彼は、そこに批判的客観性 Kritische-Objektive を認め、それを客観的精神の実体性を超えて、その合規範性 Normgemäßen や真正さ Echten を要求する理念的規範複合体 ideelle Normenkomplex であるとする。⁽⁴²⁾ 彼は、先の客観的精神 objektiven Geist との対比において、これを規範的精神 normativen Geist と呼び、次のように述べる；

「規範的精神は、文化倫理的な指導性 kulturethische Direktive を意味し、それは各々の所与や単なる相対的な有価値の状態を超えて、それを純正で真正なる有価値の方向へと押し進めようとするのである。⁽⁴⁴⁾」

従って、それは現実化の文化総体に対する倫理的指針であり、文化の在り方や進みゆく方向性に対して理念を提示する。文化が価値の実現であるとしても、現実の文化は、理念的価値の純粋な実現であろうはずもなく、そこには見せかけの価値や刹那的な主観的価値、規範の混濁や不明瞭な価値奇形等も含まれていることがあり、⁽⁴⁵⁾ それをやがて個々の人間の内面性を圧迫することもある。規範的精神は、文化倫理的な指導性によって、それについての真正な方向性を明示してくれるのである。⁽⁴⁶⁾ この意味で、Spranger, E. は、客観化された精神にみる超主観性や客観的精神にみる集合性に比して、ここには明確な規範性 Normativität を認めるのである。⁽⁴⁷⁾

このように Spranger, E. は、広大な外延と深い奥行きとを有する文化の核心を、人間の精神という言葉で言い表したのである。これによるならば、彼の文化論議においては、文化を人間の精神とその価値実現の段階性から読むことができる。即ち、前述のごとく、主観が、客観との関係において主観的精神と客観化された精神に分かれることを考慮するならば、そこには、次のような四つの連動する段階的な構造が認められる⁽⁴⁸⁾。即ち、第一に、内在的主観性であり、それは外界に存する歴史的形成物との交渉を通じて受容的に構成されていく価値可能態である。第二に、超主観性であり、それは内的に創造された主観的な価値の独自の表現によって具象化される個別の価値形象である。第三に集合性であり、個々の価値創造・表現により具象化された価値形象の歴史的相互作用あるいはそれらの集積・総和による文化総体である。第四に、規範性であり、具体的な文化総体に対する価値の理念的な存在形式である。これによって、文化は、暫定的に、次に示す連動的な四次元の階層性において捉えられるように思われる。即ち、それらは、価値の受容と創造により構成される主観的文化、価値の人格的表現としての超主観的文化、価値表現の歴史的集積としての客観的文化、そして価値の理念的な形式としての理念的文化である。

2.3. Spranger, E. の文化論議と文化の循環性

さて、文化は、Spranger, E. によって、人間の精神的営為における主観－客観関係から、連動的な階層性として描かれた。そして、前述のごとく、文化が、人間の精神的営為によって実現された価値の形象であるとすれば、価値実現もそれと同様の階層において把握され得るように思われる。即ち、価値の主観的形象、超主観的形象、客観的形象、そして理念的形象である。そして、文化と価値実現をそのような構造において読むならば、その階層性には価値のある種の動態が看とれるのではないだろうか。即ち、そこにおいて価値は、受容という形式で客観から主観へと流れ、創造という形式で主観から客観へと流れる。これによって、文化は、人間の価値実現である

とともに、その構造は人間の精神的営為を媒介とした価値の流れとして読むことも可能となる。それは何やら円環的な運動をしているかのようでもある。そうであるならば、文化は、価値のある種の運動態の具体的形象と考えられ、価値の動態に即応して動いているのかも知れない。そして、ここに文化運動 Kulturbewegung という発想が生じてくる。Spranger, E. は次のように述べる；

「文化運動は、単純に共通のものや普遍妥当なものへと向かうということではなくて、常に生き生きとした主観に再び立ち還り、そこでそれぞれの客観的構造の意味内容が解釈され、そして意味が把握されていくのである。」⁽⁵⁰⁾

やはり、文化は固定的完結的な形象ではなく、動いているのである。ただ、それはどうやら単純な円環的な運動ではないように思われる。なぜならば、それは必ず人間の精神的営為を媒介するからである。この人間の精神的営為は単純な通過媒体ではなく、独自性の高い受容と創造の場であった。人間は、個々人に対峙する客観的形象から特有の価値＝意味形象をその精神的営為において翻訳的に受容し、さらにはそれに対応した価値＝意味形象を独自の形式で創造する。そして、そこから創造された価値＝意味形象の具体的形式は、文化総体の特有の価値＝意味連関に還元されていくとともに、個々人を離れて超主観的に自律し、やがて再び主観に立ち還り、改めてそこでまた再度、翻訳的に受容されていく。そして、その特有の精神的営為によって、また独自の価値を新たに創造し、それを具体的形象をもって人格的に表現し、文化総体の特有の価値＝意味連関へと還元されていく。従って、受容される価値＝意味形象は、創造される価値＝意味形象と全く同値ではない。Spranger, E. は次のように述べる；

「個々人は、科学や芸術、そして宗教の創造者ではないのと同様に、社会倫理の創造者ではないが、そこに自らを投げ入れ、ある機会には、そこに自らの精神の一粒を付加

していくことができる。⁽⁵¹⁾」

従って、超主観的文化を創造する個々の主観は、そこに新たな意味や価値を刻印しながら、独自の形式で特有の価値＝意味形象を創造していく。それは微細であるが新たな価値＝意味形象であり、それが所与の歴史的な価値＝意味形象の総体に加えられ、これによって内的連関が動かされ、文化は新たな価値＝意味形象の総体として再構成されていく。それ故に、文化運動は、常に単純で自閉的な回転運動ではなく、何らかの変容を伴った再構成的な循環となる。まさに、文化においては完全に自動的な過程はない。なぜならば、文化はその何れのものも、人間の生き生きとした精神の創造的な中核を通してゆくからである。文化は個々の人間の微細なれども確かな刻印づけを積み重ねながら実体的に生き続け、そして再構成されながら動き続けていく。文化が生き続けるということは、無数の個々の精神的営為を通じて、常に構成的な循環運動を続けていくということである。そして、文化運動とは、価値＝意味形象の歴史的総体の単純な量的増大ではなく、無数の主観の精神的営為を通じた、価値＝意味形象の循環的な再構成なのである。

2.4. 文化運動の方向性とその根源的動因

文化は、個々の主観を離れて超主観的な価値＝意味形象の歴史的総体として実体化するが、それ自体が自動的で円環的に回転運動を続けていく訳ではない。文化が存続していく為には、やはり現実に生きている個々の創造的な主観が必要なのである。まさに、文化は、超個人的な意味連関であるにせよ、それが個々人に受容され、理解され、保持され、そして意味付与的に再創造されなければ、生き続けることができない。⁽⁵²⁾ 即ち、人間の誰しもが文化運動の直接的な担い手である。Spranger, E. は、次のように述べる；

「文化は、有機体に比して、その統一的な身体を欠いてはいるが、そのかわりに無数の個々の身体を具有した精神が与えられている。そして、個々の精神の何れのものも、

文化の全体を共に舵取りしているのである。⁽⁵⁴⁾」

これによるならば、文化の直接的な担い手である個々人の精神は、文化運動の方向性に対して実質的に関与していることとなる。即ち、個々人は、文化の進歩や発展、そして衰滅にさえも直接的に関わっている。そうであるならば、そこには文化やその文化運動に対する責任が発生するように思われる。個々人の文化創造は、それが些末な営為であるとしても、それ自体が文化運動の進行に対して相応の動因として作用するのである。Spranger, E. は、これについて逆説的に説明する；

「次のような循環も予想され得る。即ち、文化の過度な要求によって疲弊した身体的・精神的な文化の担い手は、低劣な文化をつくりだす。⁽⁵⁵⁾」

文化運動の循環は、必ずしも予定調和的に良き方向へと向かうとは限らない。文化自体も変容し、その文化の影響下において生を営む個々人の精神も受動的に変容していく。その可能性の一つとして、期せずして衰滅の一途を辿る悪しき循環も予想され得るのである。ちなみに Spranger, E. は、この後段において、さらなる悪夢のような循環 Teufelskreis⁽⁵⁶⁾ を述べている。即ち、客観的文化の悪しき災いによって病的になった人々は、その人々がもたらす大量の毒素によって、後の世代に害を及ぼすという。このような悪しき循環は、文化の衰退とともに人間の退行をももたらす。それ故に、個々人は、所与の文化のもとで生を営まざるを得ないにせよ、その文化の健全さの保持と発展の為に、ひいては人間の真正なる存在の為に、よき文化創造を行わなくてはならない。彼は、次のように述べる；

「文化の停滞は、発達過程の硬直化を意味する。従って、全ての力の変化に即応して、不断にそして自らが調整し得るような、ある種の平衡は考えられてよいだろう。しかしそれは、一般には、単なる機械的な構造が問題となるのではなく、規範的で、価値の定まった全体的形象が問題となるのである。簡単に言えば、それは歴史的に交替しつつ、

また常に規範的な価値体系に適合するように形成された文化理念 Kulturideals の実現である。それは、目標からそれないように突き進む発達過程に対して、内在的に規範と方向を与えてくれる法則性を意味する。⁽⁵⁷⁾」

従って、個々の文化創造は、それが些細なものであれ、何らかの形で文化理念の実現であることが求められる。これが、文化の階層性にもみる理念的文化の中核と言える。この文化理念は、超主観的文化や客観的文化が具体的・実体的な形象であることに比して、実体性を超越した形而上的なもの *Metaphysischen* である。⁽⁵⁸⁾そして、いかなる文化領域も、そこに存する価値や意味に奉仕することによって、理念的な独立性を有するのである。⁽⁵⁹⁾従って、ある文化の具体的内実は、それが文化理念に存する特定の価値や意味との求心的関係において捉えられることとなる。ところが、理念的文化と客観的文化は漸近することはあっても、現世的な制約によって、やはり同値になることはない。ただし、文化理念は、前述のごとく文化倫理的な指導性として、現世に生きる個々人の文化的努力に対する理念を示してくれる。Spranger, E. は古典に依拠して次のように述べる；

「かつてプラトンは、諸価値が、どのように真 *Wahren* 善 *Guten* 美 *Schönen* それ自体にまで高まりゆくかを示した。そして、すべてのエロス *Eros* は、それに向けて、豊かで神的なものを分有する為に、⁽⁶⁰⁾ 感覚的な現象世界において努めているのである。」

従って、客観的文化が文化理念に向けて高まりゆくことは、結局の処、文化それ自体の単なる自動的な回転のみではどうすることもできず、やはり個々の主観の創造的な精神活動における価値探究的な努力に依存する以外に道はないのである。この意味において、文化とは、価値選択 *Wertewahl* であり価値肯定 *Wertbejahung* であるとともに、価値の規範化 *Normierung* であると言い得る。⁽⁶¹⁾そこで、Spranger, E. は文化理念から個々人の文化努力に対して発せられる理念的な文化規範を思念し、次のように述べる；

「理念的な文化規範とは、人間の真正なる生の根源から生じ、全ての発展と秩序ある創造を、健全なる価値方向⁽⁶²⁾へ向かって舵取りをしてくれる文化構築能力一般に対する簡略的表現に他ならない。」

これによるならば、文化規範は、確かに形而上的なものから発せられるものであるとしても、それは現世を離れた彼岸の彼方に超然と存するものというよりは、むしろ個々人の生の根源から生じる規範的な文化構築能力として顕現する。それは、価値探究的なエロスであり、秩序だった文化構築能力である。これによって、文化は健全な価値方向へと進みゆくのである。一般的に見て、現世に存するどの文化もやはり依然として未完成であり、一部には欠陥を抱えていたり、傷んでいる部分もあり、それ故に、文化の高貴化によって文化理念へと向かう力が必要となる。⁽⁶³⁾やはり、ここに文化を直接的に担う個々の主観のありようが重要となる。Spranger, E. は次のように述べる；

「文化が真正な価値実現の段階を示すような状態にあるとすれば、その存続は、来るべき世代という大切な層が、形成された真正な文化内容やそのまとまった全体性を理解によって把握し、価値評価によって肯定し、そして真正な、いわば倫理的に義務づける文化理念という意味における能動的な力によって、再形成していくことに依存している⁽⁶⁴⁾のである。」

Spranger, E. の文化論議は、その最終局面において、このような正しく価値評価し、そして倫理的に創造し得る能力の重要性を注視するのである。文化の発展も衰退も、究極的には、個々の文化良心にかかっている。ただ、考えてみると、それは人間に予め備わっている能力ではなく、教えられ、そして育てられていかななくてはならないものである。ここから、彼の文化論議は教育論議へと繋がっていく。それは、いわゆる古典的な文化教育学的見解に留まらない、文化に対する責任から発せられる教育への新たな要請でもあ

る。人間が文化の直接的な担い手であることから発生する責任を認識するならば、それについての教育の役割は大きい。Spranger, E. は次のように問う；

「遠大なる文化責任 Kulturverantwortung への教育というのは、すでに存在している⁽⁶⁵⁾のであろうか？」

2.5. Spranger, E. の文化論議とその基底にある形而上学的契機

Spranger, E. が、その学的営為において、早くより文化と教育の関係を密接に捉えていたにせよ、彼の文化と教育の論議を古典的な文化教育学理論形式において捉えることには、少なからず無理があるだろう。前述の如く、とりわけ彼の戦後の著作には実存主義的教育学への萌芽を読みとることも可能であり、その文化論議にみる創造や表現、そしてそこに存する文化責任や倫理的な形成力という論議は、もはや、文化伝達云々の論議を遙かに超え出ている。従って、彼の文化論議の連続的総体についても、そのような思想動向の流れに平行して読み解かれていく必要があるように思われる。

さて、Spranger, E. の文化論議においては、人間は単なる文化の享受者ではなかった。例えば、あの創造という精神的営為は、人間の単なる文化的な存在性には回収され得ない部分を有する。つまり、人間のそのような生は、決して生物＝物理的次元、あるいは単純な文化＝社会的次元においてというより、むしろそれを超えた次元において説明されていく。それはある種の超越的な次元と言えよう。彼によれば、現世に実質的生を営む人々は、文化を体験したり創造したりするような精神的営為によってこそ、価値や意味の超個人的＝形而上的領野を分有し得ると⁽⁶⁶⁾いう。彼は次のように述べる；

「人間にとって重要なのは、価値内容や意味内容の実質である。それは啓示深い現世的構造が人間のうちに放射し、そして人間が自らの独自の深まりから現実の世界のなりゆきに対して具体的な形をもって形成的に刻印していくのである。」⁽⁶⁷⁾

個々を取り巻く文化、即ち所与の現世的構造は、人間の創造による価値＝意味形象の歴史的な総体であるが故に、そこにはこれまでの歴史的過程において人々が刻印してきた価値や意味が何らかの形で存在する。即ち、それは形而上のもの、現世的な痕跡とも言える。そして、それは個々人に対して意味を啓示深く放射してくれる。これが客観であった。個々人はそこから価値や意味を独自に受容していく。これが体験であった。そして、改めて所与の現世的構造に対して新たな意味の刻印を試みるのである。これが創造であった。Spranger, E. は、このような意味付与、即ち所与に対しても新たな意味の刻印を成し得るところに、人間の特徴をみるのである。⁽⁶⁸⁾ 価値や意味の刻印や創造は、人間の本質的特徴の一つに属する。即ち、人間の本質的な特徴としての、そのような文化的な生は、実質的生活の利便や功利ではなく、形而上的な価値や意味の受容と創造においてこそ、論じられていくのである。彼は次のように述べる；

「人間の現世的形象は、確かに生物的な構造に結び付いてはいる。しかしながら、個々の主観が精神的意識にまで高まると、特有の超時間的な生の秩序と、それとともに、いわゆる形而上学的な洞察においては、人々がそこに結びつけられているような現世的形象のような、単なる人間的な世界ではない構造を把握するのである。これについては正しく次のように表現することができる。即ち、生において生以上のものが輝くのである。このことは、宗教的な表現で次のように言い得る。即ち、人間の価値的な生において、永遠なる価値本質が現れる限り、それは啓示深い性質を呈する。そして、それは人間の形而上的な接合点 metaphysischen Nahtstellen なのである。」⁽⁶⁹⁾

人間はそのような文化的な生において、永遠なる価値本質と邂逅し得る。それは現世の制約において到達し得る形而上的な世界との接合点である。即ち、人間は、価値＝意味探究的な生において、その超越的な世界の輝きを現世にありながら浴することができる。個々の生において現世的な生以上のものが輝く。ここに Spranger, E. の文化論議における人間の文化的な生の真

意があるように思われる。彼は次のように述べる；

「人間にとって重要なことは、ただ単に生きていくところにあるのではなく、むしろ立派に würdig zu leben 生きようとするところにこそある。いいかえるならば、あらゆる文化は、より高次な価値を実現しようと努力している⁽⁷⁰⁾のである。」

ただ生物的に生を営むのではなく、よりよい生を営もうとすることが、ひいてはよき文化の創造へと繋がっていく。人間の価値＝意味探究的な生こそが、よき文化運動の原動力であり、それ故に、それが文化の高貴化に向かつてなされる文化努力であることが要請される。そして、人間の個々の精神的な営為が、独善的であってはならず、やはり常に文化理念へと向けられた文化努力でなくてはならない。Spranger, E. は倫理的な文化創造の最高点⁽⁷¹⁾を形而上的な領域にみるのである。

さて、Spranger, E. の文化論議においては、人間は文化の単なる享受者であるのみにとどまらず、文化の直接的な担い手でありつつも、価値＝意味探究的な、文化の直接的な創造者であり、そして文化運動の理念的な操縦者であった。人間のそのような存在形式や生は真正な価値を求める態度に起因⁽⁷²⁾し、彼は、そこにこそ文化の究極的なアプリアリ Apriori をみるのである。そして、それはまさに形而上的世界へと接近しようとする価値＝意味探究的な存在形式である。従って、彼の文化論議は、人間の価値＝意味探究的な存在性によって、単に文化＝社会的次元に留まらない、むしろそれを超えた精神＝理念的な次元をも包み込み、その頂点は形而上的な次元にまでも到達する。文化論議は、現実の文化実体に確かな立脚点を置きながらも、その視野は形而上へと及ぶ。さらに突きつめて表現するならば、形而上学的次元にこそ教育学における文化論議の頂がある。ここに、Spranger, E. の文化論議の集約点が存するように思われる。

2.6. 体育学における文化論議の可能性

体育学において文化を論じる場合、体育が密接に関わりを有する文化領域、例えばスポーツや身体文化の諸形式が、その対象として挙げられてくることであろう。体育において、人々は走り、跳び、投げ、ある時はボールを追い、ある時は舞いもするだろう。それは生物的合目的性を超えた文化現象の諸形式としてみることができ、ここでは、それらの諸領域あるいは諸形式を、暫定的に身体運動文化として括ることとしたい。体育学における文化論議は、さしあたりこのような身体運動文化に対して学問的な責任を有することとなろう。

さて、身体運動文化も、Spranger, E. の文化論議に基づき、何らかの価値の現世的な実現であるとともに、人間が永きにわたる営みの中で積み重ねてきた、人間的—精神的価値の総和であると捉えることができるように思われる。従って、身体運動文化にも、所与の歴史的・物理的制約のもとで、ある価値がある特定の形態によって表現されていると考えられる。そうであるならば、身体運動文化も、人間の精神的営為の賜であり、可視的には身体的・物理的に映ずるにせよ、その内実は特有の価値＝意味連関として捉えることができよう。

このように身体運動文化を捉えることができるならば、それは、文化一般と同様に、主観—客観の関係から、次のような階層性において構造化されることであろう。第一に、主観的文化としての次元であり、個々の人間が身体運動文化の諸形式を受容・創造する価値可能態である。ここでは、その身体運動文化の具体的形象を翻訳的に受容することによって構成された独自の価値世界であり、同時にそれは、個々の創造・表現に対する可能態と言える。第二に、超主観的文化としての次元であり、個々の人間が、自らのうちなる価値創造によって身体運動文化の具体的形式を人格的に表現し、身体運動文化の総体に対して、新たに刻印された価値＝意味形象を還元していく。個々人のうちに創造された価値の表現は、全く独自の形式においてなされる。そ

れ故に、そこに実現された価値＝意味形象も独自のものであり、そこに大小・強弱という程度はあるにせよ、身体運動文化の歴史的総体に代替不能な動的契機として算入されていく。第三に、客観的文化としての次元であり、それは無数の個々の創造・表現の歴史的な相互作用とその集積として存在する、身体運動文化の価値＝意味形象の歴史的総体である。この身体運動文化の歴史的な総体は、個々の創造・表現において実現された価値＝意味形象の流入によって生起する相互作用とその集積・総合によって常に再構成されていく。即ち、そこに常に新たな価値＝意味が刻印されることによって、総体としての価値＝意味形象が構成的に運動する。この運動の方向性は、決して予定調和的なものではなく、進歩・発展とともに没落・衰滅へも開かれている。身体運動文化もこのような文化運動の過程において捉えられ、このような意味において常に動いており、そして生きていると言える。そして、第四に、理念的文化としての次元であり、身体運動文化の形而上的で純粋な理念的価値複合体である。それ故に、それは身体運動文化の実体に対する文化倫理的な指導性を有し、現世の制約のもとでなされる身体運動文化の文化的努力に対して理念的的方向性を示してくれる。身体運動文化領域も、形而上的の領野に存する価値に奉仕することによって、理念的な独立性を有することとなる。従って、身体運動文化の具体的内実も、理念的な次元に存する価値との求心的関係において捉えられることとなる。ただし、身体運動文化においても文化総体の実質とその文化理念は漸近することはあっても、現世的な制約によって、同値になることはない。

さて、身体運動文化も、これらの四つの次元を連動する階層性から構造的に捉えられるとすれば、やはりそこにも個々の文化受容・創造を媒介とした価値の循環運動が看取り得ることであろう。即ち、身体運動文化の諸形式に内在する固有の価値を独自の形式で翻訳的に受容した価値可能態は、それをまた所与の制約の中で、また新たな独自の形式で価値を創造し、それを人格的に表現していく。このようにして表現された新たな価値＝意味形象は、個々を離れて文化総体に還元されていく。それは無数の創造的契機であり、

それによって文化総体の内的連関は運動し、やがて新たな価値＝意味形象へと再構成されていく。

ただし、個々の文化倫理が拙ければ、結局の処、その創造は劣悪なものとなる。そして、そのような劣悪な創造が文化総体に還元され、それによって価値混乱や奇形・錯誤をきたし、これが充進していくとその内的な価値＝意味連関は次第に劣化し、身体運動文化の文化総体はやがて没落的な方向へとつき進んでいく。例えば、あるスポーツが多く個々人によって受容され、無数の文化創造・表現を通じて、その文化総体の生運動を展開するが、個々人が受容する文化の具体的形象の各々は、必ずしも全てのもが文化倫理に適うとは言い切れない。例えば、スポーツ競技においてみられるのは、必ずしもよきプレイや全身を貫くような感動をおぼえるパフォーマンスのみではなく、やはり醜悪なプレイや低劣な競技姿勢、意図的な不正等、劣化した価値＝意味形象までもが含まれてくる。さらには、それらを受容する個々人が必ずしも適正な見識を兼ね備えているとは限らず、ひいてはその創造・表現も文化倫理的な指導性に添った方向で為されるとは限らない。そのような劣化した価値＝意味形象が無数の個々人を通じて、さらに低劣な表現が行われ、それが再び文化総体に還元され、そこで価値混乱や奇形・錯誤が充進すれば、その身体運動文化はやがて衰滅の一途を辿るだろう。これは、Spranger, E. が恐れるところの、あの悪夢のような循環に等しい。

従って、身体運動文化のこのような文化運動ないしは価値循環においても、依然として調整作用が不可欠である。それは、まさに文化倫理的な指導性と個々人の精神的営為に存する倫理的な形成力である。これによってこそ、身体運動文化は、進歩的・発展的な循環を継続し得るのである。即ち、身体運動文化の総体的実相が、仮にある程度疲弊していたとしても、個々はそこから真正な内実を受容し、その創造において規範的な構築能力によって文化理念の導きの光を目指して努めていく、このような理念的な文化努力によってこそ、よき価値創造とよき身体運動文化表現がなされ、その相互作用と集積によって、やがては身体運動文化も豊饒化し、そして高貴化の道を歩

み進むように思われる。そして、個々はこのようなよき循環の直接的な操縦者である。従って、ここに身体運動文化に対する個々の文化責任が存在するのである。

さて、身体運動文化も、人間の価値実現による歴史的な運動体であった。従って、その身体運動文化の究極的なアプリアリも、やはり人間の価値＝意味探究的な存在性にある。ただし、身体運動文化に関する人間の価値＝意味探究的な営為も、独善的であってはならず、やはり常に文化理念へと向けられた文化努力でなくてはならない。このような文化的努力の有機的な相互作用と総和によってこそ、身体運動文化は高貴化に向かってよき循環を続けていくものと言える。従って、身体運動文化のよき文化運動の進展には、個々の価値可能態に通底する倫理的な形成力が極めて重要となる。

ところが、それは先験的に備わっているものではない。実に、それは適正に教えられ、暖かく育まれ、そして常に覚醒されなくてはならない、そのような形成的・開発的な能力である。ここに教育への連絡通路が開かれているのである。即ち、身体運動文化の適正な循環には、身体運動文化に関わる倫理的な形成力を直接的に取り扱い得る教育が必要である。体育は、この意味において、身体運動文化の文化運動に対して、重要な役割を担っているように思われる。体育学における文化論議は、やはり最終局面においては、体育の本質論議へとつながっていくのである。

体育学における身体運動文化論議においても、人間は身体運動文化の単なる享受者であるのみにとどまらず、価値探究的に生を押し進めながら、そのなかで身体運動文化の具体的形式から真正な価値を受容し、そして価値・意味形象を独自の形式で倫理的に創造し、身体運動文化の文化運動を理念的に操舵する、そのような存在形式として論じられ得るように思われる。従って、体育学において身体運動文化論議を突き詰めていくなれば、単に文化＝社会的次元に留まることなく、むしろそれを超えた精神＝理念的な次元をも包み込み、その頂点は形而上的な次元にまでも到達することであろう。体育学においても文化論議は、本質的に形而上学的視野を要請するのである。

3. 結 語

体育学における文化論議は、やはり確固たる問題領域の一つである。体育が直接的に関わると思われる身体運動文化についての学問的責任は、やはり現存の学領域においては体育学が主導的に担わざるを得ないであろう。この意味において、体育学においてはこれに関する問題設定を積極的に試み、それについての学的努力を積み重ねていく必要がある。とりわけ、身体運動文化の本質規定やその文化的独自性の問題、ひいてはその教育的可能性についての論議は、体育学において極めて本質的な課題の一つであると考えられる。従って、体育学は文化論議に資する有効な知見を拡充していくとともに、より積極的に文化論議を立ち上げていくことが求められる。

さて、これまで Spranger, E. の文化論議の分析に基づいて、体育学における文化論議を試みてきた。彼の文化論議は、その時事的な事情に起因する分断もあり、決して連続的・発展的なストーリーとして読むことは難しいが、その総体を大局的に眺めるならば、そこに確固たる確信が窺える。即ち、それは人間の形而上的存在性に対する確信であり、価値＝意味探究的な生とその現世的努力に対する絶対肯定である。このようにして彼の文化論議を読み改めるならば、それは一種の人間学的確信に裏付けられた教育学的文化理論とも言えよう。随所に散りばめられた文学的・宗教的表現によって戸惑いを覚えることはあっても、おそらくそのような人間学的確信を正しく踏まえるならば、体育学は、彼の文化論議から、多くの有効な知的契機を得ることができるように思われる。無論、彼の文化論議は、そこに一定の学的有效性が認められるにせよ、やはり多くの文化論議との相対的な関係において精査される必要がある。体育学は、Spranger, E. の文化論議に基づいて為された、このような文化論議も、その可能性の一つであることを正しく認識しつつも、その有効性ともに限界を厳粛に弁え、さらに検討を進めていくことが求められるように思われる。

4. 註および引用・参考文献

- (1) 教育思想史学会（編）教育思想事典，勁草書房，pp. 615-617.
- (2) 小笠原道雄（1974）現代ドイツ教育学説史研究序説—ヴィルヘルム・フリットナー教育学の研究—，福村出版，p. 15.
- (3) 小笠原道雄（1999）精神科学的教育学の研究—現代教育学への遺産—，玉川大学出版部，p. 10.
- (4) 山崎英則（1995）生涯。村田昇（編）シュプランガーと現代の教育。玉川大学出版，p. 10.
- (5) Schulze, R. (1958) Pädagogische Strömungen der Gegenwart, Quelle & Meyer, S. 13.
- (6) 典拠は数限りないが，例えば，次の文献がその一つとして挙げられる；
天野正治（1966）シュプランガーにおける陶冶理想の構造探究，東京教育大学教育学部紀要，12：3。
加えて，Flitner, W. の記述によれば，「Kulturpädagogik」という名称は，Spranger, E. の教育学理論に対抗する学的勢力から与えられた意図的な区別名称であったのかも知れないが，これについては本稿においては扱わない。
Flitner, W. (1970) Allgemeine Pädagogik, Ernst Klett Verlag, 13 Aufl, S. 47.
- (7) 教育思想史事典，op. cit., 1), p. 615.
- (8) 乙竹岩造（1926）文化教育学の新研究，目黒書房，p. 438.
- (9) 野田義夫（1930）文化教育学原論，人文書房，p. 12.
- (10) 神力甚一郎（1975）現代教育の文化哲学的基礎—戦後教育の哲学（その3）. 金沢大学教育学部紀要（人文・社会・教育科学），24：1.
- (11) 村田昇（1996）シュプランガー教育学の研究，京都教育大学研究叢刊，26：6
- (12) 典拠は数限りないが，例えば，次の文献がその一つとして挙げられる；
篠原助市（1947）独逸教育思想（下），創元社，p. 168.
- (13) 新井保幸（1974）1920年代シュプランガーにおける文化教育学思想の特質，教育哲学研究，30：31-32.
- (14) 山崎英則（1996）シュプランガー教育学へのいざない，近代文芸社，p. 42.
- (15) 新井保幸，op. cit., 13), p. 33.

- (16) 野田義夫, op. cit., 9), p. 146.
- (17) 辻幸三 (1929) 文化哲学概論, 内外出版, p. 2.
- (18) 新井保幸, op. cit., 13), p. 30.
- (19) 菊池龍三郎 (1975) ノールとシュプランガーの教育学における主観と客観の
関係について, 茨城大学教育学部紀要, 24 : 107.
- (20) 天野正治 (1963) Spranger における教育学学問論の展開, 東京教育大学教
育学研究集録, 2 : 5-6.
- (21) 野田義夫, op. cit., 9), p. 156.
- (22) 天野正治 (1960) シュプランガーの内面的学校改革について—戦後シュプラ
ンガー教育思想の一考察, 教育哲学研究, 3 : 60.
- (23) Spranger, E. (1928) Das Deutsche Bildungsideal der Gegenwart in
geschichtsphilosophischer Beleuchtung, Quelle & Meyer, S. 3.
- (24) Spranger, E. (1953) Ist der moderne Kulturprozeß noch lenkbar ?
Kulturfragen der Gegenwart, Quelle & Meyer, S. 43.
- (25) Spranger, E. (1922) Lebensformen—Geisteswissenschaftlich Psychologie
und Etik der Persönlichkeit, 3 Aufl., Max Niemeyer, S. 6-7.
- (26) Spranger, E., ditto, S. 3.
- (27) Spranger, E., ditto, S. 5-6.
- (28) Spranger, E., ditto, S. 7.
- (29) Spranger, E., ditto, S. 14.
- (30) Spranger, E. (1925) Psychologie des Jugendalters, Quelle & Meyer, S.
13.
- (31) Spranger, E., a, a, O., 25), S. 19.
- (32) Spranger, E., ditto, S. 337.
- (33) Spranger, E., ditto, S. 21.
- (34) Spranger, E., ditto S. 15.
- (35) Spranger, E., ditto, S. 6.
- (36) Spranger, E. (1948) Kulturbegegnung als philosophische problem,
Kulturphilosophie und Kulturkritik, Gesammelt Schriften V, Quelle &
Meyer, S. 295.
- (37) Spranger, E., a, a, O., 25), S. 17.
- (38) Spranger, E., ditto, S. 16
- (39) Spranger, E., ditto, S. 6-7.
- (40) Spranger, E., ditto, S. 354.
- (41) Spranger, E. (1933) Umriss der philosophischen Pädagogik, Pilo-

- phische Pädagogik, Gesammelt Schriften II, Quelle & Meyer, S. 19.
- (42) Spranger, E., a, a, O., 25), S. 7.
- (43) Spranger, E., ditto, S. 16.
- (44) Spranger, E., ditto, S. 17.
- (45) Spranger, E., ditto, S. 16.
- (46) Spranger, E., ditto, S. 16-17.
- (47) Spranger, E., ditto, S. 7.
- (48) 新井保幸, op. cit., 13), p. 34.
- (49) Spranger, E., a, a, O., 25), S. 11.
- (50) Spranger, E. (1955) Die Eigengeist der Volksschule, Schule und Lehrer, Gesammelt Schriften III, Quelle & Meyer, S. 299.
- (51) Spranger, E., a, a, O., 25), S. 271.
- (52) Spranger, E. (1947) Kulturpathologie ?, Kulturphilosophie und Kulturkritik, Gesammelt Schriften V, Quelle & Meyer, S. 181.
- (53) Spranger, E., a, a, O., 24), S. 46.
- (54) Spranger, E., a, a, O., 52), S. 179.
- (55) Spranger, E., ditto, S. 174.
- (56) Spranger, E., ditto, S. 189.
- (57) Spranger, E. (1926) Die Kulturzyklentheorie und das Problem des Kulturverfalls, Kulturfragen der Gegenwart, Quelle & Meyer, S. 30.
- (58) Spranger, E., a, a, O., 52), S. 175.
- (59) Spranger, E., a, a, O., 25), S. 22.
- (60) Spranger, E., ditto, S. 341.
- (61) Spranger, E., ditto, S. 325.
- (62) Spranger, E., a, a, O., 52), S. 187.
- (63) Spranger, E. (1948) Philosophische Grundlegung der Pädagogik, Philosophische Pädagogik, Gesammelt Schriften II, Quelle & Meyer, S. 133.
- (64) Spranger, E., a, a, O., 57), S. 34.
- (65) Spranger, E., a, a, O., 24), S. 65.
- (66) Spranger, E., a, a, O., 25), S. 342.
- (67) Spranger, E. (1941) Weltfrömmigkeit, Philosophie und Psychologie der Religion, Gesammelt Schriften IX, Quelle & Meyer, S. 247.
- (68) Spranger, E., a, a, O., 50), S. 296.
- (69) Spranger, E., a, a, O., 41), S. 11.

- (70) Spranger, E. (1937) Kulturmorphologische Betrachtungen, Die Erziehung, S. 492.
- (71) Spranger, E., a, a, O., 52), S. 186.
- (72) Spranger, E., a, a, O., 70), S. 495.